

おじさん構文

鶴川第二中学校 三年

伊藤 凜いとう りん

日曜の昼下がり、私、松崎アカリは大学時代の友人のサキと、卒業後初めて会っていた。

「久しぶりだね。サキ、ちょっと痩せたんじゃない？ 仕事きついなの？」

「そんなことないよ。アカリはどう？」

「私はいび慣れてきたかな。職場の人たちもみんな優しいし。」

その時、私のスマホが鳴った。父からのメールだった。父は、一人暮らしを始めた私が心配らしく、毎日のようにメールを送ってくる。

「もう。お父さんが毎日メールしてくるよ。見て。」

「あ、その絵文字、うちの上司も使ってるよ。」

そういえば、うちの上司も使っているな。丸くて黄色い顔で、色んな表情がある絵文字。上司も父も、文末には必ずこの絵文字をつけている。便利なのはわかるけど、ここまでくるとちよつとださい。いわゆる「おじさん構文」てやつだ。

「なんでおじさんたちって、この絵文字使うんだろうね。若者は使わないよね。」

そんなくだらない話をしていると、時間はあつという間に過ぎ、私はサキと別れ、家に向かって歩いていった。今日の晩ご飯はどうしよう。何かお惣菜でも買ってしまおうかな。一人暮らしを初めてもう半年になるが、自炊にはまだまだ慣れない。でもよく考えたら、昨日作った煮物が残っている。ちよつと少ないけど、それでいいか。このままどこにも寄らず、まっすぐ家に帰ろう。そんなことを思っていたのに、私はついこまれるように、黄色い顔の絵文字の看板がかかっている店に入ってしまった。

「すごいですね。また入っていききましたよ。」

地球の様子を見ている、二人の宇宙人がいた。

「この絵文字の睡眠効果は想像以上だったな。あの時、地球を滅ぼさなくてよかった。」
「と、言いますと？」

「君はこの仕事に就いたばかりだから、よく知らないのか。三十年前、我々は地球を植民地にしようと思っていたんだ。しかし、地球の代表者たちは、それを受け入れず、我々と戦おうとした。地球人を滅ぼすのは簡単だったが、我々も滅ぼしたい訳ではない。そこでちよつと開発されていた睡眠技術の実験台として、地球を使うことを思いついたんだ。」

「そうだったんですね。確かに、我々の星で実験するわけにはいかないですからね。しか

審査員賞
伊藤凜「おじさん構文」

も、実験は大成功。あの看板を見た地球人どもは、絵文字の催眠効果によって私たちの店を使わずにはいられないのだから。店は繁盛し、我々はいつまでも利益を得続けられる。一石二鳥ですね。」

「地球人にとつても、実験協力することで、元の生活を続けられるというメリットがあるからな。三十年前の約束に従って、元の生活を守るために、一日に使う絵文字のノルマを必死でこなしている人間がいるなんて、若い地球人どもは考えたこともないんだろうな。」

審査員講評

よく聞く「おじさん構文」に着目した発想にうなり、じつは地球を救うために絵文字を使っているのだという秘密にもドキッしました。「おじさん構文」という言葉はネガティブな文脈で使われることが多いですが、本作を読んだあとにそれに触れるとポジティブな気持ちになるはずで、物事のとらえ方をよい方向に変換してくれる逸品でした。

—— 田丸 雅智